平成18年度卒業式
卒業証書・学位授与式によせて　学長告辞

本学の学部での4年間、勉学に励まれ、今日ここにめでたく学士の課程を修了した皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆様をここまで支えてこられたご家族をはじめ、ご臨席下さいました来賓の方々、本学をご支援くださいました多くの方々に、深くお礼を申し上げますとともに、５１４名の卒業生の新しい出発を前にして、この喜びを分かち合いたいと思います。

私も、45年前に同じように徽音堂から旅立ちました。早く飛び立っていきたくて、卒業式のことはあまりよく覚えておりません。ただ、この講堂に座っていたこと、当時は久米学長であったことだけは覚えております。その後、いろいろな大学で学んだり、教えたりして、今ここで皆さんを送り出すという運命を、この大学との深いご縁と思いながらここに立っております。

４年前に、お茶の水女子大学に入学された時と同じこの徽音堂で、本日、皆さんは卒業の日を迎えました。この４年間が、皆さん一人ひとりにとって、どのような時間であったか、そのことを問いながら、あるいは卒業後の生き方や明日からの生活への期待に胸を弾ませて、ここにお座りであろうかと推察いたします。

この４年間、本学は大きな変革の波をくぐりました。皆さんが入学された時、本学は国立大学お茶の水女子大学でしたが、３年前、他の国立大学と同様に法人化され、国立大学法人お茶の水女子大学が現在の名称です。国立大学法人になったからといって、皆さんにとって、ほとんど変化していないと感じられるでしょう。しかし、皆さんは、法人化前のお茶の水女子大学に入学した、最後の学生ということになります。歴史的に希少価値をもつあなた方の卒業にあたり、学長からのメッセージを贈りたいと思います。

まず、４年にわたる大学本館とこの徽音堂の改修が昨年完了しました。本学が現在のJR御茶ノ水駅の近くから、ここ大塚の地に移転した74年前、関東大震災による校舎崩壊の教訓を生かして、強固なコンクリートの基礎の上に校舎を築きました。その基礎をそのまま壊さず使い、できるだけ建設当時の様態を保存する形で改修が行われました。本日は、改修が完成したこの徽音堂での最初の卒業式となりました。

一昨年、創立130年を迎えたことを記念して、卒業生をはじめ本学を支援してくださる多くの方々からいただきましたご寄付により、まず徽音堂の空調設備が完成しました。これを、本学自らが努力した結果として文部科学省に高く評価していただき、徽音堂に改修工事の予算をつけていただくことができたのです。また、今日のピアノ演奏は、美しい音を響かせてくれました。美しい音を奏でる講堂という意味をもつ、この「徽音堂」の名称にふさわしいピアノは、いただきましたご寄付のなかから、新しくこの1月に購入することができました。すばらしい音色を放つこのスタインウェイが、皆さんの卒業を祝ってくれています。法人化以前は、国立大学はご寄付をいただくことはできませんでしたが、法人化で変わった大学の新しい姿の一端です。

本学の創立は1875年、明治８年です。いまから１３２年前になります。本学の前身は、東京女子師範学校として設立されました。我が国で最初に、女性に高等教育の機会を与え、教師を養成するために、日本の政府が創った師範学校です。東京大学が今年創立130周年を迎えましたので、それより２年だけ早い創立です。本学の卒業生には、世の中の指導的な立場で活躍した方、現在も活躍している方たちがたくさんいます。特に、教職について活躍された方は、全国の隅々にまでわたっています。

優れた女性リーダーを育む校風と伝統とは、大学が女性に開放され、共学の大学が生まれた昭和２４年の後も、現在まで絶えることなく続いています。日本の科学や学術の方向を決めていく文部科学省の科学技術・学術審議会には30名の会員がおり、その内の約３０％に当たる10名は女性です。とても興味深いことに、その半数近くが本学の出身者です。これは驚くほどの大きな比率です。多くの共学の大学を卒業した女性の圧倒的な多数を考えれば、本学がいかに多くの優れた研究者を輩出してきたか、そのことを明白に示しています。

８７の国立大学法人の中で、本学と奈良女子大学が２つの女子大学として存在しています。私学にも多くの女子大学が存在しています。一方、アメリカの東部には名門の女子大学があります。かつては、セブン・シスターズと呼ばれた７つの名門女子大学がありました。しかし、バッサー・カレッジが共学になり、ラドクリフ・カレッジも学生がハーバードの学生を兼ねるようになって、事実上共学になり、現在はファイブ・シスターズとなった女子大学が、全寮制の少人数教育を守りながら、今も、入学時の高い競争率のもと、優れた女性を世に送り出しています。 (次ページへ)

平成18年度卒業式
卒業証書・学位授与式によせて　学長告辞

平成18年度卒業式
卒業証書・学位授与式によせて　学長告辞

（前ページより）

アメリカで、初の女性大統領候補となる可能性がささやかれているヒラリー・ロダム・クリントン上院議員とコンドリーザ・ライス国務長官について、ふれてみたいと思います。ライスは15歳で大学に入りました。ヒラリーは知事夫人でありながら「全米100人の弁護士」に選ばれており、二人とも傑出した秀才であることは間違いないのですが、二人の人間的な個性を興味深く思います。

ヒラリー・クリントンは、ファイブ・シスターズの一つであるウェルズリーカレッジの出身であり、女性の仲間と居ることが多かったのです。ウェルズリーでは寄宿舎生活を通して、一生続く友人を得ました。女子大学はリーダーシップを発揮するのには最高の環境でした。それに対して、ライスは男性の中の紅一点で居ることがほとんどでした。二人とも50歳代、権力に近い位置にいるという共通点があります。

しかし、二人のタイプは正反対です。ライスは無駄のない最短距離のキャリアを走っているのに対し、ヒラリーは回り道をしながらキャリアを積み、いろいろな状況での経験を生かしながら大きく成長しています。ライスは障害をさける直感が鋭く、ヒラリーは敵と向かい合いながら力をつけていきました。ライスは物事の潮時をみるセンスが抜群であり、周囲への心遣いが完璧ともいわれています。ヒラリーは何度も落ち込み、引きこもりながらも、再生する力がつよく、その度に大きく成長していきました。

ヒラリーとライスのキャリアの築き方、人間関係のネットワーク形成のしかたは、それぞれ大変魅力に富んでいます。同時代に生きる私たちにとって、「これは私に近い考えだ」、「私はヒラリータイプだ」、などと、較べてみることもできます。この二人は、皆さんのこれからのキャリア形成の参考になると思います。これらは、岸本裕紀子さんが書かれた新書『ヒラリーとライス　アメリカを動かす女たちの素顔』に詳しく描かれています。

この本を読んで私が大変感激したことがあります。二人の両親に共通していること、それは娘に教育の重要性を教えたことです。ヒラリーは「教育を受ければ自分たちの環境をいくらかは支配出来るようになる」と両親から聞かされていたといいます。ライスの両親も「あなたには教育で何も欠けているものがない、と白人が思った時、自分自身の環境がコントロールできるようになるわ」と、同じことをいっています。なんと、すばらしい両親でしょう。人を育てるのは、教育です。教育のもつ偉大な力が、今、日本では見過ごされているように感じます。「教育を受けることで、自分の環境を変えていくことができる」、なんと力強い言葉でしょう。

皆さんは、新しい人生のスタートに立っています。約半数の人たちは大学院に進み、半数の人は社会に出て行くことでしょう。本学は女子大学として、ヒラリーが学んだ場と非常に似た環境にあります。本学は女性のリーダーを育成することを目標に掲げております。リーダーというのはもちろん様々な場面でのリーダーです。大統領になるのは極々限られた人ですが、地域の活動や自分が属する職場など、いろいろなところで周囲を変えていける、その元になるのが教育です。

皆さんは、このお茶の水女子大学の少人数教育の中で、女性同士が切磋琢磨し、４年間たくさんのものを身につけてきました。私自身、卒業生として、本学の行き届いた教育は生涯に及ぶ貴重な財産であったと思いますし、また、これからもその財産を生かしていきたいと思っています。大学は、先生方の目が行き届き、手塩にかけて皆さんたちを育てくださった、そういう場でございます。皆さんも、本学で受けた教育はどこの大学にも勝るすばらしい教育であると誇りをもって巣立ってください。そして、もし何かに迷ったときには、本学はいつでも皆さんに開かれています。また、大学院に入って学ぼうと思われたときはいつでも喜んでお迎えいたします。

先ほども申し上げましたように、本学には長い伝統があり、卒業生がたくさん世の中で活躍しております。日本国内のどこでも、そして、世界の主な都市でしたら探せばきっと、本学の卒業生がおられます。このネットワーク、大勢の卒業生、仲間、同級生の、ネットワークを大切にし、本学で受けたさまざまな勉学をご自分の力として、自分の周りを変えていく、そういう形でこれからの新しい生活に踏み出していただきたいと思います。そして、またいつの日か卒業生として、後輩を励ましに本学を訪れて下さい。

ご卒業本当におめでとうございます。　　（了）

平成18年度卒業式
卒業証書・学位授与式によせて　学長告辞

平成18年度卒業式
大学院学位授与式によせて　学長告辞

本学大学院研究科修士課程での２年間、あるいは博士課程での3年間前後、勉学に励まれ、または博士論文を提出され、今日ここにめでたく修士または博士の学位を授与された皆さん、おめでとうございます。

皆さんをここまで支えてこられたご家族をはじめ、ご臨席下さいました来賓の方々、ご支援くださいました多くの方々に、深くお礼を申し上げますとともに、皆さんの新しい出発を前にして、この喜びを分かちあいたいと思います。

日本の研究者に占める女性の割合は１１．９％で、先進国の中で非常に低い値です。第3期科学技術基本計画が昨年から始まりましたが、その中に、5年間で自然科学分野の女性研究者の割合を２５％にすると書かれています。　本学の女性教員の割合は４０％です。国立大学の中では、最大の比率です。５０％にまで増やす責任が組織の長にあると考え、努力を続けております。

国際的な女性科学者である本学の卒業生のことを少し紹介させていただきます。私が尊敬する科学者湯浅年子先生です。本学の前身である東京女子高等師範学校の卒業生であり、理学部で物理学の教育もご担当されました。原子核物理学者として国際的に活躍された日本で初めての女性の研究者です。

湯浅年子先生は第二次世界大戦が勃発した頃、ご自分の研究をジョリオ・キュリー先生のもとで続けたいという強い決意をもってフランスに渡りました。当時のパリは、研究も思うにまかせない状況でしたが、それでも戦局がいよいよ激しくなるまで研究を続けられ、ついには大変な思いをしてシベリア経由で日本に帰られました。

本学でしばらく教鞭を執られましたが、戦後の日本の状況ではなかなか思い通りの研究ができず、その後再度フランスに渡られて、フランスでご研究を続けながら生涯を終えられました。湯浅年子先生の残された資料は本学にたくさんございまして、湯浅先生のご生涯を研究している卒業生もいます。湯浅先生は教養が深く、ご研究の傍ら短歌を詠まれ、また、パリを訪れる日本の先生方は、心からおもてなしを受け、お世話いただいたと、いうお話をいろいろな方々から聞いております。

湯浅先生の日記の一節をご紹介したいと思います。これは１９６５年1月1日（朝4時半）の日記です。今年こそは守りたいと、５つの項目をノートに書いておられます。

1番目。本質的なことのみ考え、本質的なことのみ実行するようにすること。

研究をするということは厳しいものです。物事の本質を考え、そして本当に大事なことだけを実行する。私は、ここに書かれたことに大変感銘を受けます。

２番目。余命のある限りを、出来るだけ仕事に尽くして、少なくとも何かひとつ仕事をふっきるようにすること。

研究には、ここで終わり、ということはありません。ある程度解決すると、また次に新しく未知の問題が広がってきます。しかし、これで一つのことが終わった、片が付いた、とするのも大事なことです。いくつもやりたいことを抱えていないで、一つに集中し、ある程度自分の納得のいくことができた、としたい気持ちがよく分かります。「ふっきるようにすること」というのはこういったことかと思います。

３番目。生活も仕事も芸術的に、すなわち趣味をもってするようにして、できるだけ美しく行なうこと。

湯浅先生はたくさんの短歌を詠み、たくさんの手紙を書いています。本学の卒業生の方の中にも湯浅先生からいただいた手紙を大事に持っていらっしゃる方も大勢います。歌集もあり、いろいろなご本もあります。ご興味のある方は是非ご覧頂きたいと思います。

４番目。怠惰をいましめ、老化を防ぐこと。

５番目。人の意見を良く考えること。

湯浅先生は55歳のときにこの日記をお書きになっています。この日記からお人柄が偲ばれ、若い方がお聞きになっても、すばらしい決意だと思われることでしょう。

本日、博士号を授与された方の中には、ライフスタイルを考慮した本学の大学院の教育のシステムを生かし、50歳代で入学され、６０歳代で今日を迎えられた方がおられます。すばらしいことです。何歳になっても勉強したいという熱意を、今日ここに拝見することができてうれしく思います。

本学の課程を修了されて学位を授与された方々、本学で学んだことをどうぞ誇りにして、日本で、あるいは国際的な場でご活躍ください。来年度には、「主婦を研究の世界に呼び戻そう」というプログラムをスタートさせます。本学には、主婦でありながら学んでいる学部生、大学院生がたくさんおります。このプログラムにもご注目ください。

学ぶことは生涯を通じて為されることです。これを忘れないで頂きたいと思います。　（了）

平成18年度卒業式
大学院学位授与式によせて　学長告辞